

「根拠」に基づき、論理的に 考え、表現する力を養う

東京都立川市立立川第二中学校

立川市立立川第二中学校では、「根拠」に基づき考えを述べさせる発問や、ルーブリックを用いた評価など、さまざまな工夫をしながら、教科横断で言語活動に取り組んでいる。その結果、自分の考えを持つ生徒、相手を意識して話せる生徒が増えただけでなく、教師の意識も大きく変わった。

◎課題意識

自分の考えを 自信を持って伝える力に課題

立川市立立川第二中学校が、立川市の指定を受けて言語活動に取り組み始めたのは2010年度のこと。「思考力・判断力・表現力等を育む授業改善」をテーマに全校体制で授業改善に着手した。その内容は、赴任したばかりの常盤隆校長にとって、必ずしも満足できる内容ではなかった。授業改善の中心は話し合い活動を中心にした内容が多く、生徒が考えを深めていく工夫が足りなかった

と、常盤校長は振り返る。

「言語活動と話し合い活動はイコールではないことを、先生方に理解してもらったところから始めなければならぬと感じました」

翌11年度、東京都「言語能力向上推進校」に指定されたのを機に、クリティカル・リーディング、クリティカル・シンキング(図1)の考えを取り入れた言語活動を研究の中心に据えた。授業中に考える場面、表現して伝える場面を設定することで、分析的・論理的思考力を育み、物事や情報をうのみにせず、自分で考える力を身に付けるのがねらいだ。常盤校長がクリティカル・リーディング、

図1 クリティカル・リーディング&シンキング



クリティカル・シンキングを活動の柱に据えたのは、生徒の気質への課題意識があった。「生徒は優しくて穏やかな半面、自信を持って自分を表現する積極性が欠けていました。」

*同校の資料を基に編集部で作成

School Data

◎1947(昭和22)年開校。地域との結び付きが強く、地域と連携した「あいさつ運動」「高尾山ナイトハイク」は伝統的な活動。2011～13年度東京都教育委員会言語能力向上推進校。13年度東京都教育委員会スポーツ教育推進校。



校長◎常盤 隆先生

生徒数◎488人 学級数◎15学級(うち特別支援学級1)

所在地◎〒190-0012 東京都立川市曙町3-29-46

TEL◎042-523-4338

URL◎<http://www1.m-net.ne.jp/dai2/>

公開研究会◎未定

*プロフィールは2014年3月時点のものです

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

彼らに自信を付けさせ、意見交換が出来るようになれば、学校全体にもっと活気が生まれるのではないかと期待しました」（常盤校長）

一方、現場の教師が最も課題に感じていたのは、学びに向かう姿勢だった。研究主任の菅真代先生は次のように話す。

「授業中に、生徒からよく『テストに出ますか』と聞かれます。成績に関係することには一生懸命ですが、それ以外のところで目標を持って挑戦する熱意が弱く、自分の考えを述べたり表現したりしない生徒が少なくありませんでした」

●言語活動での留意点

根拠を示し 論理的に表現する力を付ける

指導において最も重視するのが、「根拠」を示しながら論理的に表現する力を付けること。「根拠」は、生徒がそれまでに学んだ「既習事項」を指す。自分が持っている知識や経験を総動員して課題を追究することによって、思考力・判断力・表現力を高めると共に、知識・理解の定着を図ろうとしている。

例えば、国語の授業で学んだ倒置法や擬人法などの表現技法を用いた俳句鑑賞もその1つだ。「私はこの部分が心に残りました。その理由は、○○の表現技法が使われ、それによって○○の効果が生まれているからです」というように、既習事項を活用し、それを根

拠に示しながら結論と結び付けられるように指導する。国語科の棚田優子先生は、「以前に習った内容を思い出せるような発問を心掛けています」と話す。

社会科での言語活動は、資料やデータの読み取りが中心だ。生徒は教科書の中から答えを探そうとしがちだが、教科書に書いてあることだけでは説明しきれないことを、幅広い資料やデータを活用させながら体感させる。

また、社会科では、ワークシートを活用して、授業中の生徒の思考の方向性を見取ることも大切に行っている。社会科の江坂正人先生は、次のように説明する。

「発言だけに注目すると、発表が得意な生徒の意見に固定してしまいます。人前で意見を言えない生徒も考えていないわけではなく、書くことによって意見表明できます。そういう生徒の思考の深まりや方向性を把握するためにも、ワークシートに書かせて意見をすくい上げるように心掛けています」

●言語活動の評価方法

独自の「二中基準」で 思考・判断・表現を評価

「思考・判断・表現」の評価は、独自の「二中基準」という3段階のルーブリックで行う。ステップ1「自分なりの考えを持って表現する」、ステップ2「根拠（理由）を示して自分なりの考えを表現する」、ステップ3「自



立川市立立川第二中学校校長
常盤 隆 ときわ・たかし
「生徒が自信を持って自分の考えを表現でき、相互交流できるような教育を進めたい」



立川市立立川第二中学校
主任教諭。国語科担当。「先生になりたいな」と生徒たちが思うような姿を見せたい」
江坂正人 えさか・まさひと



立川市立立川第二中学校
主任教諭。国語科担当。「感動的な中学校生活を演出できる教師でありたい」
棚田優子 たなだ・ゆうこ



立川市立立川第二中学校
主任教諭。研究主任。英語科担当。「生徒に求める分、自分も自分のことを語れる人間でありたい」
菅真代 すが・まよ



立川市立立川第二中学校
国語科担当。「何事も、本気で、真剣に取り組むと楽しくなる」。この思いを伝えられる教育をしていきたい」
大澤友紀 おおさわ・ゆき

分の考えを修正し論理的に表現する」。これを基に、各単元や授業に応じた評価基準を作成する（P.12図2）。例えば、「根拠はあるけれども、結論がずれている」という場合は、「知識・理解」の観点ではマイナスイタだが、「思考・判断・表現」の観点では評価の対象となる。生徒にも分かりやすい評価であり、そうでなければ意味がないと考えている。「ステップ3の『論理的に』というのが一

図2 「二中基準」国語科、家庭科の例

	ステップ1	ステップ2	ステップ3
3年生国語科	社説で述べられている主張に対して自分の考えを持っている。	社説で述べられている主張について、根拠(理由)を挙げた上で賛成、反対などの意見を発表する。	社説で述べられている主張に対して、他の発表する意見を聞いて、自分の意見を修正したり深めたりして発表する。
2年生家庭科	献立を立てる時に必要な条件を自分なりのことばや文章で表現している。	各自の考えたことを伝え合い、班員で協力して1つの献立を考えている。	他の班の発表を聞き、自分なりの考えを入れながら、自分の考えを見直し修正を加えていき、考えや工夫を深めていく。

*同校の資料を基に編集部で作成

番難しいところ。根拠は妥当でも結論が飛躍していることも多く、ここは今後の指導上の課題でもあります(常盤校長)

定期考査に記述問題を盛り込む教科も多い。国語では、「走れメロス」の単元で、メロスが山賊に襲われるシーンについて「山賊は王様が仕組んだものか、偶然出てきたのか、あなたなりの根拠を挙げて述べなさい」という設問を入れた。答えはどちらでも構わない。自分なりに文中の描写や価値観を根拠にして解答していれば加点される。

「200字程度の記述問題を出すと、以前は諦めて何も書かない生徒が大勢いましたが、この問題では無回答の生徒はほとんどいませんでした。既習事項を根拠として自分なりの

考えを持つ授業を通して、思考から逃げない姿勢が身に付いたのでしよう(棚田先生)

●言語活動が活性化する風土づくり

「ビブリオバトル」で互いを認め合う雰囲気をつくる

言語活動の質を高めるには、人の話を聞く力や生徒同士が認め合う雰囲気づくりが重要となる。こうした学級づくりにつながる取り組みの1つが、13年度に始めた「ビブリオバトル」(*)だ。自分の薦めたい本を5分間でプレゼンテーションし、2分間の質問タイムの後、最も読みたい本を参加者が投票し、「チャンプ本」を決める。

この活動で同校の教師が最も重視したのが、聞き手が発表者に「質の高い質問」をすることだ。以前、2年生で「私の宝物」というテーマでスピーチを行った時、その後の質問では「宝物の値段はいくらですか?」「どこで売っていますか?」という浅薄で表面的な質問しかされなかったことがあった。国語科の大澤友紀先生は、その活動をこう振り返る。

「『なぜそれがあなたにとって宝物なのか』を聞いてほしかったのですが、生徒は質問することを意識して話を聞いていないために、断片的なキーワードしか頭に残っていませんでした。質問をするための訓練が必要だとは思いませんでした」

大澤先生は、ビブリオバトルを行う際には、

プレゼンテーションで気になったことはメモして、質問の材料にするよう生徒に指導した。「気になることは人それぞれ違うから、正解はありません。自分が思うことをメモしてください」と伝えたところ、的を射た質問が出る生徒が増えていったという。

ビブリオバトルの公開授業では、教師が驚くほど生徒はよく質問した。

「『質問はありますか』と聞くと静まり返ってしまうのが、本校のいつもの光景でした。それが、ビブリオバトルの時は何人も手を挙げて、本の内容に深く切り込んで質問をする姿に驚きました」(菅先生)

「チャンプ本」を決める投票は、本に対する熱い思いを語れているかを基準に行った。「私たちは雄弁な生徒を育てたいわけではありません。本番では、つたなくても一生懸命に、自分がどれだけこの本が好きかを伝えられた生徒が紹介した本に票が集まりました。主張に説得力があるかどうかというところを重視して選んでくれたのはうれしかったです」と、大澤先生は頬を緩める。

●研究授業の進め方の工夫

「生徒の動き」に着目し教科を超えて授業を見合う

研究授業は教科横断で行う。そこで、授業を見るポイントとして「生徒の動きを見ること」を挙げている。

*立命館大の谷口忠大准教授が考案したゲーム形式の書評合戦のこと。詳しくは右記ウェブサイト参照。http://www.bibliobattle.jp

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

図3 研究授業の付せんの活用例

黄色の付せんは対象生徒のつぶやきや行動を記録する。

13:22 A 思考ボードを開き、真剣に取り組み、他の生徒と細かいところまで確認していた	13:22 B しばらく何もなかった。友達の声かけにより、やっと思考ボードを開き、確認を始めた	13:22 C 落ち着かない様子。「分からない」とつぶやきながらしばらく何も記入できなかった。机間指導中の先生に助けを求めた
---	--	---

青色付せんは対象生徒の思考・判断・表現を記録する。

13:22 D 手をあげて発言した。先生の問いかけに適切な説明ができた。思考ボードは見ないで自分の言葉で表現できた	13:22 E 指名されて発言した。思考ボードを見ながらではあるが、しっかりと説明ができた	13:22 F 思考ボードを開き、電圧計の使い方について気付いたことを新たに書き加えていた
--	--	--

赤色付せんは生徒全体の行動について記録する。

13:22 ほとんどの生徒が思考ボードを開いて確認した。最初に何もなかった生徒は4名。積極的に意見交換して確認している生徒が6名	13:22 先生の問いかけにほとんどの生徒が手をあげた。3名の生徒が発言した。他の生徒は3名の発言をしっかりと聞いていた	13:22 すぐに活動に移れない生徒が半分以上いた。先生の厳しい指導により、思考ボードを全員が開くまでに3分ほどかかった
---	---	---

2011年度の研究授業(理科)では、教室全体を見る教師と、特徴の異なる6人の生徒の動きを追う教師に分かれて、授業を見取った。3色の付せんを使い、黄色には生徒のつぶやきや行動、青色には生徒の思考・判断・表現の変化が見られた行動、赤色には生徒全体の行動を記録した
*同校の資料を基に編集部で作成

ている。13年度の生徒意識調査によると、「意見を言うとき、その根拠や理由を明確にして話すようにしている」という生徒は、11年度の56%から75%（できている+まあできている）に増加。授業で記録する習慣が身に付いた生徒、相手を意識した

「当たり前障りのない感想を述べ合う研究授業・研究協議会では、行く意味がありません。あくまで生徒を中心に据えて、教科を超えて先生方が活発に意見を交換できる研究授業・研究協議会となるように工夫しています」(常盤校長)

参観側の教師は、「この発問で生徒がこのように動いていた」「誰々は指示が分からず固まっていた」など生徒の活動を観察する。「先生に視線が集まりにくいので、授業をする方も緊張せずに済みますし、生徒の動きに対しての意見なので、他教科でも抵抗なく発言できます。このスタイルを取り入れてから、研究授業が活発になりました」(江坂先生)

研究授業の方法は、生徒のグループごとに担当教師を決めて観察する方法と、異なるタイプの生徒を数人取り上げて、授業内における変容を見る方法がある。前者は、学級全体

がどのように動いていたのか、各グループで生徒がどのように活動していたのかを見るのに適している。生徒の思考の深まりを個別に見る場合は、後者となる。活発に発言するタイプ、静かに考えるタイプなど、特徴の異なる生徒を数人指定し、その生徒の動きや発言、表情、ノートの記事内容を付せんに記録し、事後研究ではそれらを基に話す(図3)。「自分の指示や発問によって生徒がどのように動いたのかは、授業をした自分自身も知りたいところ。指示の仕方が悪かった、発問があいまいだったなど、生徒の動きから知ることが出来るのは貴重な体験です」(棚田先生)

●成果と課題

日常の場での生徒同士の意見交換が今後の課題

授業改善の成果は生徒の変容となって表れている。13年度の生徒意識調査によると、「意見を言うとき、その根拠や理由を明確にして話すようにしている」という生徒は、11年度の56%から75%（できている+まあできている）に増加。授業で記録する習慣が身に付いた生徒、相手を意識した

聞き方や話し方が出来る生徒も増えている。何よりも大きな成果は、教師の意識改革がなされたことだ。

「私たちの世代は、なかなか自分の授業スタイルを崩せません。うまくいかない力不足を省みず、つい生徒のせいにしてしまいます。学校を挙げて新しい取り組みを進める中で、若手の先生方の工夫を目の当たりにし、ベテランの先生方も積極的に授業を変えてみようと考えようになったのは大きな変化です。教師の意識を変えることが、研究の最大の目的であることを改めて感じました」(江坂先生)

「研究授業は私も生徒も緊張しますが、年に最低1回はそういう場に身を置いて、自分にプレッシャーをかけながら新しいことに挑戦していきたい。そういう姿勢を持ち続けることで、教師もより良いものを目指して頑張っていることが、生徒にも伝わるのだと思います」(棚田先生)

今後の課題は、話し合いや討論などの学習活動を更に充実させることだ。

「ここ数年で、生徒は自分の意見を自信を持って言えるようになりました。その力を活用して、生徒同士でもっと意見交換や交流が出来るようになってほしいと考えています。公開授業などの特別な場だけではなく、日常の授業でも出来るようになれば、本校は更に活性化していくはず」(常盤校長)